ガン人生を生きる

東京近郊にあるお寺のご住職が寺院向けの月刊誌・『寺門興隆』に、次のような興味深い体験談を寄せておられました。

それは十年ほど前のことです。
このご住職が担当医師に「どうもガンのようです。念のため細胞組織を採取して確実な診断を下しましょう」と告げられ、検査結果を待つことになったのです。

何も手につかないほどすっかり精神的に落ち込んでいる時、思いがけず顔なじみの植木職人のＡさん（70）から、声をかけられたのです。

「住職さんどうしたい？元気ねえなぁ。淋しい背中してるよ」
「いやぁ、ガンの疑いがあると言われてねぇ…」と力なく答えると、Ａさんは
「あぁそう。オレなんか胃がんと肝臓ガンをかかえてるよ。昨日今日のことじゃない。三年前にわかったんだよ！」
と、まったく屈託のない明るい笑顔で語るのです。
「えぇー、本当に？よく元気で働けるねえ。それで病院の方は？」
と思わず問い返すと、
「病院？いくつもの治療方法を教えられたけどよう、みんなお断りしたよ。この体に傷つけられないものねえ。だって生まれたときに傷ひとつない立派な体を仏さまからお借りしたのだから、死ぬときには無傷の体でお返ししなくっちゃ申し訳ねえと思ってね…。
それにガンのやつだって俺の体の居心地がいいから住みついたんでしょう。つまりガンは同居人。仲良く楽しくやっていこうと心に決めたのさ。アッハハ！」

Ａさんの、何とも言えない大らかさに驚きながら、このご住職、重ねて聞くのです。
「不安じゃないの？ガンで死ぬってこと怖くないの？」

すると、Ａさん目を見開いて次のように答えたのです。
「住職さん、オレ、ガンと同居していて気がついたことがあるんだよ。それはね、ガンのやつ、オレを殺そうと思ってオレの体に住んでいるとは思わねえってこと。
だってオレが死んだ時にはガンのやつも死ぬんだよね。ということは、つまりガンと心中するってこと。
だから時々胃と肝臓のあたりをおさえてガンを叱りつけてやるのさ。『ガンよ、お前、オレを殺すということはお前も死ぬということだぞ！おまえ長生きしたかったら、オレに長生きさせろ。わかったかあ！』ってね。
これがガンに聞こえたらしくて、ガンのやつ、大きくならねえ。
先日も検査で先生が言っていた。
そうヤスヤスと死ねるもんかい。第一、ガンと心中なんて色っぽくねえじゃねえか」

このＡさんの言葉に、住職の心は晴れました。そうして、覚悟を決めて診断結果を待ちました。

ー待つこと一週間ー
「ガンではありませんでした」という嬉しい知らせが病院から届いたのです。

この時から、ご住職は、Ａさんが語る“ガンとともに生きる心の持ち方”を、ガン宣告によって心を閉ざした人々に、是非知ってもらおうと、精力的に紹介していかれたそうです。

ガン患者にとって、このＡさんの生き方は、どれほど勇気づけられたかわかりません。

話を聞いた多くのガン患者が死の淵からよみがえり、幾人もの人がガン病棟から帰還したといわれています。

あれから十年・・・、
今年八十歳になるＡさんは、今も二つのガンをかかえながら、現役の植木職人としてハツラツと働いているとのことです。

まことに驚くべき事実であります。
昔から「病は気から」と言われていますように、心と体（特に免疫系）は密接に結びついています。
おそらく、Ａさんの前向きな生き方が、人間に備わっている免疫力や自然治癒力を高め、その結果、ガン細胞の増殖、転移を抑えているのではないかと思われます。

しかも注目すべきことは、Ａさんの生き方が、大変仏教的だということです。

最も忌み嫌うべきガンを敵対視せずに、仲良くやっていこうとしたり、或いは、ガンに向かって「オレを殺すということはお前も死ぬということだ。長生きしたかったらオレに長生きさせろ」と言ったりしていることは、まさに仏教の中心思想「自他一如（他を生かすことはそのまま自分を生かすことである）」に相通じるものがあります。

大げさに言えば、Ａさんは、仏教的な生き方でもって、ガンを治療したと言えるでしょう。

ただここで誤解しないで頂きたいのは、Ａさんのような治療法を積極的に奨めているのではありません。
あくまで、その生き方を参考にしてもらいたいということです。

つまり、どのような治療を受けようとも、結局は自分の力（免疫力や自然治癒力）で治さなくてはなりませんから、Ａさんのような大らかで、前向きな生き方（仏教的な生き方）を大いに参考にしてもらいたいのです。

そうして、このような生き方を身につけることが出来れば、たとえ病気が治らなくても、それを苦にすることなく、病をしっかりと引き受けていく、そんな人生が開かれてくると思います。

平成２０年９月　　「光明寺だより５８号」より